今日のイラスト 400　「 イラストでたどる萩往還㉑ 六軒茶屋」　　古谷眞之助

六軒茶屋という地名は、そのものズバリ、かつてここに茶屋があったためである、と長州藩の地理誌「防長地下上申」に書いてある。しかし今は、参勤交代の際の御駕籠建場としてもこの地は紹介され、建物も復元整備されている。ただし、「サンデー山口」本文にも書いたように平成 12 年 3 月、山口県教育委員会作成の解説板には「1㌔弱戻った『一貫石』近くにも御駕籠建場があったと伝わる」と書き加えているところから、ここが間違いなく駕籠建場だったという確証はないと考えて良さそうだ。当時の絵図「行程記」を見ると、確かに駕籠建場の印が一の坂に確認できる。しかし、それは一の坂の一里塚よりも上部である。そしてこの六軒茶屋は、明らかに一の坂の一里塚よりも下部にあるのである。絵図に残っているのに、どうしてここに御駕籠建場を復元したのか分からない。絵図の位置関係では間違いとしか思えないから、敢えてそのような断りを付記しているのではないかと邪推している。そしてそれにはもう一つの根拠がある。私は今から 11 年前の 2009 年にここを初めて歩いたのだが、その当時、六軒茶屋の上部、つまりイラストの右手上に、以下のような看板が立っていた。「案内板には御駕籠建場と記載されていますが、(中略)ここは庶民の地で昔からここより奥に位置の坂水茶屋という御駕籠建場があり、再調査を願うも無視され、(中略)県は六軒茶屋復元と称し買収され史実とは違うものを造られ、この地に祭神された諸神々、数百年前より辛苦流汗して開いたご先祖に申し訳なく、又復元というので協力した地主として子々孫々までも禍いを残すので、ここに明記し之を建てるのであります。(以下略・原文のまま)」文章は少しまずいが、元地主としての悲痛な叫びと言えるだろう。そして、この地主が建てたと思われる「一貫石」近くにあった標識の写真(小写真)も掲載しておこう。ここには「御駕籠建場、一の坂御茶屋跡」と書いてある。地形図と絵図とを見比べれば、写真の位置はほぼ絵図に示された御駕籠建場の位置に一致すると私は思っている。残念ながら、この看板と標識は、今は失われている。なお観光協会作成の「萩往還ルートマップ」にも御駕籠建場の位置は六軒茶屋ではなく、正にこの位置に明記されている。(2020.12.22 記)

イラストでたどる萩往還 ㉑　六軒茶屋

文・イラスト＝古谷眞之助

江戸時代、ここには六軒の茶屋があり、一の坂御駕籠建場も設けられていたと伝わる。その内の伊藤家建物の南側の一室は周りよりも少し高くされて、藩政時代には藩主の休憩場所「御前の間」として使用された。当時はそこから眼下はるかに山口の街並みまでが見通せたという。

復元された立派な建物群は山口県文書館所蔵の図面に基づいて建てられたとのことだが、一の坂御駕籠建場の位置がここだったかどうかは微妙なところらしい。というのも、説明板には「1㌔弱戻った『一貫石』近くにも御駕籠建場があったと伝わる」とわざわざ断っているからで、もとより御駕籠建場は接近して設けられるはずもないからである。